

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：小泉順也

論文題目：二十世紀前半のフランスにおけるポール・ゴーガンの受容研究

－ 芸術家表象と作品蒐集をめぐる芸術社会学的考察 －

小泉順也の博士学位請求論文、「二十世紀前半のフランスにおけるポール・ゴーガンの受容研究－芸術家表象と作品蒐集をめぐる芸術社会学的考察－」は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍したフランスの画家ポール・ゴーガンを、没後の受容、評価という観点から研究した独創性あふれる学問的達成である。

ポスト印象派の画家として著名なゴーガンに関しては、その人物と作品に関してこれまでに多くの研究蓄積があるのは言うまでもない。しかしながら、本研究が目指すのは通常の意味における画家論でも作品論でもなく、受容という視点からのゴーガンの再検証であり、西洋文明を逃れてタヒチに移住したこの特異な芸術家の評価、名声が没後に確立していくプロセスの解明である。そのための具体的な手がかりとして著者が取り上げるのは、美術批評を始めとするゴーガンにまつわる同時代の言説のみならず、没後にゴーガンを主題に制作された絵画作品、そして個人コレクションから美術館へと移動するゴーガンの作品の軌跡である。通常受容研究はともすれば言葉による評価史に傾きがちであることを、描かれた芸術家像、購入や寄贈を通じた作品の公的認知という観点から問題にアプローチしたのは斬新な着眼であり、本論文の独自性を明確に示している。そのために著者は広範かつ綿密な作品と資料の調査を行い、画家が生前から仕掛けていた自己神話形成の戦略を踏まえた上で、没後に他の画家たちがその作品の中でいかにゴーガンに対するオマージュや追悼、 маниフェストや歴史的な位置づけを表明したのかを見事に分析するとともに、ゴーガン作品が個人の蒐集家や画商の手から美術館に入ることでいかに公的な承認を勝ち得たのかを適確に解析した。その美術史的、芸術社会学的な考察を通して、近代フランスの画家の没後のイメージと評価が変転し、確立していく興味深い運命を描き出すことに成功したのである。

本論文は「本文」との二つの「別冊」から成る。本文は2部構成で全8章、および序論と結論が加わる。別冊は一方には註と参考文献が、他方には主要人物の略歴、図版一覧、図版、表が掲載されている。以下、論文の構成に即して議論を紹介し、審査委員からの指摘を記しておく。

序論において、ゴーガン研究の現状を踏まえ受容研究としての本論文の意義を提示した後に、第1部「描かれたゴーガン——没後の芸術家表象の変奏」では、主に四つの典型的な作品を分析する。その前提として第1章では、1903年に没したゴーガンに対してサロン・ドートヌヌやヴァレール画廊で行われた没後の回顧展やシャルル・モリスの二度にわたるアンケートをめぐり、賛辞と批判の混在からゴージェニズム（ゴーガン主義）が誕生するまでの多様な批評状況を確認している。続く第2章から第5章でゴーガンの死後表象に関わる4点の作品を分析する。第2章では、ゴーガンと直接の面識を持たなかった南仏の画家ピエール・ジリウーの《ゴーガンへのオマージュ》

(1906年)を取り上げた。タヒチの風景の中にゴーガンとその友人、支持者を配したこの集団肖像画は、画家の没後に敬意を表した最初の絵画作例であるが、著者はオマージュの過剰ともいふべきその特質を浮き彫りにした。第3章ではポール・セリュジエの《ティテュルスとメリボエウス(さようならゴーガン)》(1906年)に焦点をあて、師ゴーガンとの別離と独自の芸術宣言という画家の意図を、1907年のアンデパンダン展での展示戦略とからめて分析する。第4章ではオディロン・ルドンの《仏陀》(1906年)に、仏教図像を媒介にしてゴーガンへの私的な追慕の念が込められていた可能性を指摘している。第5章ではモーリス・ドニによるプティ・パレ美術館の天井画《フランス美術の歴史》(1918-25年)に挿入されたタヒチの裸婦像に着目しながら、美術批評家、蒐集家でもあるドニ特有のゴーガン評価、フランス美術史への組み込み方を検証している。

第2部「遺された作品の行方——公的承認への道程」では、作品の所蔵歴を通してゴーガン受容の様相を明らかにする。第6章では、ゴーガンの作品を蒐集した初期のフランス人コレクターの活動を丹念に跡づけることで、コレクション形成の黎明期における熱意ある蒐集家の重要性を浮かび上がらせている。第7章では、個人蔵の作品が美術館に収められていく1910年以後の段階に注目し、20世紀前半のフランスにおけるゴーガンの作品収蔵の歴史を解明する。とりわけリヨン美術館による1913年の《ナヴェ・ナヴェ・マハナ(悦楽の日々)》(1898年)の先駆的な購入について詳細に調査し、ルーヴル美術館による1927年の《白い馬》(1898年)の購入にも触れながら、偶然にも左右される購入の複雑な経緯や状況を明るみに出し、公的承認の紆余曲折を検証した。第8章では、現在の状況をも視野に入れながら、ゴーガンが繰り返し滞在したブルターニュにおける受容の問題を取り上げる。当地におけるゴーガンの評価に際してはパリとは異なる地方特有の事情が作用し、1985年にボン＝タヴェン美術館が創設されて、かつての芸術家コロニーは近代美術の聖地へと決定的な変貌を遂げた。地域振興、観光資源としての芸術家受容の問題を、社会学的な視野も取り入れて論じている。結論では本論のまとめが述べられているが、芸術家の評価が歴史的に形成されてきたものである以上、受容研究の重要性は今後さらに増すと展望している。

以上のように、本論文は芸術家表象と作品蒐集という新視点に立脚して、フランスにおけるゴーガン受容の諸相を地道な調査活動を基に明らかにしており、その画期的な功績を高く評価する点で審査員全員の意見は一致した。従来は注目されていなかった画家や蒐集家、見逃されていた作品を掘り起こし、丁寧に論じていることも本論文の重要な成果と見なされる。このほかに審査員からはタヒチ時代と神話形成、生前の評価史との関係など、没後の評価史という問題の枠組みを越えた質問や、個別論に関して分析や読みを深めるべきとの具体的な注文が出されたが、それらはむしろ今後の課題と言うべき指摘であった。また専門的な論文でありながら、明快で読みやすい文体も好ましいと判断されている。引用資料における誤訳、本文における誤字脱字が散見するとの指摘もあったが、それらは瑕疵に過ぎず、本論文の学問的寄与を大きく損ねるものではないことが確認された。

以上の審査の後、審査員全員による協議の結果、全員一致で本審査委員会は、小泉順也の提出論文を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定した。